

平成25年1月30日
(2013年)

平成23年度吹田市立博物館事業評価報告書

吹田市立博物館協議会
委員長 一瀬 和夫

吹田市立博物館の平成23年度事業評価について吹田市立博物館協議会では平成24年6月29日および平成24年11月19日の協議会において慎重に審議した。その結果について吹田市立博物館がめざす9つの活動目標に沿って報告する。

1 展示 総合評価 4.1点

(1)常設展示

常設展示はリニューアルがむずかしい現況の中で体験コーナーや展示品の展示替えや解説方法で変化をもたせようと工夫している点は評価できる。財政的な問題もあろうが、今後大規模リニューアルがむずかしい場合、このような部分的な手直しを行ってゆくのか、展示構成の見直しをどのように考えるかが課題である。特別展がよく開催されている万博などのテーマは、常設展の構成にいれることも考えられる。また、大型展示品（ジオラマ等）の有効な演出などにより、リニューアルのイメージを与えることも可能かもしれない。

さらに、展示をより身近なものにするために、例えば話題の文化財の発見等をニュースと絡めて関心を高めるなどの解説に工夫が必要である。

(2)企画展

これまでの吹田市立博物館の教育活動は、将来何らかの形で地域や館に蓄積され市民社会に還元されていく展望をもったものだった。今、市民の博物館に対するニーズは「ものしり」の養成だけに終らず事物、事象から別の価値を発見し、創り出していく多様性の理解と育成も求めている。企画展はこうした市民の関心に応えるものとなっている。

企画展は年6回開催され、2本は上海万博と東日本大震災に関わる時事的なものであり、時機にあった展示は企画、出品資料等、速やかな対応が必要である。あと3本は地域と関係した展示で、人物、祭礼、学校と各種のテーマを扱っている。あと1本は障がい者をはじめする多様な利用者に向けて、資料に触れてみる（ハンズオン）という展示を展開している。このように興味深く幅広いテーマで多くの企画をなしていくのは大変な労力であったと評価したい。

年6回の企画展開催は比較的狭い展示スペースであることから可能なのかもしれないが、狭いスペースで企画をしっかりと立てて、それに応じた展示をしている点は評価できる。しかし、過去の展示と同様な内容とテーマがあり、博物館利用者の多方面からのニーズを取り扱うことができるよう内容検討を充分にはかってもいただきたい。年6回開催が効果的かどうか、必ずしも自転車操業が好ましいとは言えない。年3～4回に減らし、調査研究、資料収集整理、館の自力の蓄えに力を注いではどうか検討を要するところでもある。

吹田市に関する多くの課題（問題）を市民に問題提起して喚起し、ともに考えていこうとする試みは重要なことである。その方法として博物館側からの展示が一方的になりすぎないように第三者評価を行った上で、あらゆる機会に市民参画を呼びかけ、館との整合性をもたせようとする姿勢は評価できる。学芸員をはじめとしたスタッフが厳しい条件の中で市民の継続的な学習の深まりや広がりに応えたものであり市民社会を豊かにしている。

展示解説も多くの機会をとらえて行われており、評価できる。

① 「春期特別展・万博市民展」

上海万博の開催を機に企画され、きわめて時宜に適ったものであっただけでなく、テーマ自体が市民の高い関心をよぶものであった。豊富な館蔵資料を有効に利用して展示を充実させたほか、各種の関連イベントを多数催した。今後もこのような企画をたてられることを望む。一方で、市民ニーズを反映した多彩な行事の実現があったようであるが、長中期的な館全体のポリシー、ミッションがみえにくいところもある。

② 夏季展示『自然から学ぼう－災害と環境－』

アンケートに「過去の展示物と今とのつながりが分かりにくい」という指摘があるが、自然現象を体感させ考えさせる科学館的な展示を多く取り入れてみてはどうか。

③ 秋季特別展『さわる－みんなで楽しむ博物館』

参加型の五感をフルに活用して自由に楽しめるものである。吹田市の博物館ならではの収蔵品からくる本物のドキドキ感を味わいながら創造性を育み新しい可能性を開くことができ、来館者の好奇心を満たしてくれる、親しみの湧く企画展であったと評価できる。

過去5回の展示を踏まえて障がい者対応というシンプルな発想から、展示ジャンルを充実させ、資料点数の拡大があった。

刊行図録は点字・触図を掲載するユニバーサルな内容であり、吹田市立博物館の独自性をアピールする貴重な資料として位置づけることができる。その後、立体図のパンフレットは千葉市美術館の動物展のパンフレットにも使用されていた。

一方で、さわる展示手法の継続的調査・研究も望まれる。すなわち、さわる展示物が多数あるというのは、来館者にとって歓迎すべきことだが、資料が雑然と並べられているだけという見方もできる。さわることで博物館は何を伝えたいのか、来館者は何のためにさわるのかについて、引き続き情報収集、検討、分析していくことが望まれる。

また、さわるという表現は露骨な感じもする。アンケートに「表層的な取り組みだけで見る者に訴えられるだろうか」「資料にさわれないのが常識」というアンケート回答もあり、あえてさわるという意義とさわれないというケジメのもと、本当にしっかりと資料を見ていくような取り組みとなっていくことも望まれる。展示物が増えたために、一部の資料がさわりにくい状態になっていたことも指摘しておきたい。

地元の点訳サークル、視覚障害当事者の積極的協力は評価でき、「地域に根ざす博物館」をめざす方向性に異論はないが、点字キャプションや図録の点字表記にミスがあった事実が象徴するように、展示はもちろん、関連イベントの質をどうやって確保するかが課題であろう。視覚障害の啓発イベントなど、展示関連の一部の行事は、博物館で開催する意味が必ずしも明確でなかった。展示担当者（博物館）と協力者（一般市民）という単純な図式でなく、市民ボランティアと博物館スタッフがともに学びあえる建設的なワークショップも必要であろうか。また、現実的には「予算不足→ボランティア活用」となるのはやむを得ない面もあるが、点字資料の製作などは、第三者チェックを依頼する姿勢も大切だと考える。市民参

画のあり方を再検討していただきたい。

④ 吹田市無形民俗文化財指定記念展『どんじ祭りー古式を伝える祭祀』

アンケートにある「文字より展示が多くわかりやすい」と「展示品が少ない、祭りの意味がわからない」との対立的な評価をどうとらえるか。アンケートと連携、参画といったことについて今後展示評価を行う必要がある。

⑤ 特別企画「むかしのくらしと学校」

体験学習の要素を多く取り入れ、見学先の学校からは、よい学習ができたという好評であったようだ。今後は校外学習、学校との連携教育、博物館利用割合をさらに高めるために、まずは交通面での支援が重要な課題である。

⑥ 『小松左京写真展ー宇宙に翔く夢ー』

アンケートと連携、参画といった展示評価を今後行って、類似の企画立案を行う際の方向性を検討する必要がある。

2 市民参画 総合評価 3.8点

市民との協働・連携事業については、企画展示において市民参画を多く取り入れ、市民参画の充実に欠くことができないものとなっている。今後も企画展は、市民参加を基調とした事業計画で地域社会の発展に寄与することを期待する。

市民のボランティアで運営されている喫茶コーナーは、来館者の味覚や香りと云った複数の感覚をさらに刺激することで展示の記憶や印象を刻印することができ、リピーター作りに一役買うことができる。また、来館者の憩いの場にもなるため今後とも充実化を図っていただきたい。

そのためには市民参画制度の存在を市民に幅広く PR する必要がある。そして、その受け入れにはそれ相当の体制を整えることも重要な事項であり、それが可能ならさらなる多様なメンバーの参加のふくらみが期待できる。企画内容をより充実活発化させるため、メンバーは固定せず、偏らず、排他的にならないよう、総合的に年齢・性別、経験度等バランスのとれた構成を組む方策の検討が望まれる。そうした配慮から、安易に恒常的なものとすることや選択肢がせざるような事態が考えられるときには逐次、再考する必要がある。また、育成には利用者に不快感を与えることがないように十分な時間をかけ、登録制の導入など役割と責任の明確化をはかり、受身から主体性をもった組織の育成が望まれる。

ボランティア研修は企画評価の充実に大いに結びつくもので、多様な能力をもったボランティアの育成にもつながることから大いに推進されたい。

今後も地域社会を変えていく力を持つ豊かな館であるため市民の力を活用し、市民と学芸員との交流もはかりながら事業計画を進めていっていただきたい。また、アンケートの目的に沿った集計結果の分析とその結果にもとづいた活用が早急に望まれる。

協議会委員の市民公募については現行では任期が短くその任を果たしにくい。また、その人数も現行2名を6名にし、3名ごとに半数交代とするという形が現実的であり、望まれる。

3 地域学習の拠点 総合評価 3.7点

多種多様な数多くの事業を実施し、子ども・若年層に対するイベントや出前講座なども積極的に行い、地域学習に大きく貢献していることは評価できる。こうした取組は負担もあるが、今後も博物館の本来の業務をおろそかにしない範囲で続けて頂きたい。また、本来ター

ゲットとすべき若年層については参加が難しいところもあり、抜本的な方策を検討する必要がある。

バックヤード見学は、博物館の収蔵品の管理とあり方、その扱いに対する館の姿勢を顕示するとともに身近に感じさせ、博物館そのものに対する理解を深めさせる上で意義があり、博物館利用を促進する一環として評価できる。今後もこの試みを継続して頂きたい。

他館との連携については高槻市など歴史に力を入れている団体との連携は評価できる。しかし、北大阪ミュージアムネットワーク事業が、実際には3館めぐりとなったことについては、やや安易な取り組み方であったように思われる。また、「西国街道」連携事業は広域な歴史文化を理解するうえでも必要と思われ、さらなる展開を期待する。広域連携の積極的推進により相互の施設の活用はもとより、より広域的な活動や文化財等の普及が進むものと思われる。

アンケートについて、「イベント満足度は未調査」とあるが、これはイベント参加者の印象や意見を館が把握していないということであり、改善の必要がある。イベントの評価を行う上で、アンケート調査における満足度は重要である。

レファレンス業務や特別利用についても博物館として必要なことであり、評価できる。今後とも充実を図っていただきたい。

4 情報発信 総合評価 3.4点

ホームページは年々コンテンツの変更を行い、徐々に充実している。年度当初に年間展示計画の公開をはじめ、事業報告・事業評価などの公表なども果たされている。また、「博物館だより」は広報誌として一定の役割は果たし、『館報』も事業報告と研究発表という情報発信の機能を果たしている。

広報活動に関して、市報掲載記事は行事や動きがよく分かって目につくので不可欠なものであるが、それ以外のメディアにおいてもより一層の努力を期待する。情報提供は欠かさず行われているものの、マスコミに取り上げられる機会が少ない。その影響力は大きいだけに市民参画など吹田市立博物館の特徴を全面にだすことで話題性を作る努力をする必要があろう。

資料のデータベース公開は今後も実現に向けて検討していく必要がある。ますます博物館への興味が引き出されるような努力を期待したい。

5 学校教育との連携と支援 総合評価 3.6点

特別企画「むかしのくらしと学校」展は、体験学習の要素を多く取り入れ、小学生にとって博物館施設になじむいい機会にもなり、その効果は充分期待できる。見学がむずかしい学校への出前授業も好評であり、評価できる。小学校からのさらなる利用としては、小学校6年生の社会科での利用が考えられるが、多忙な6年生の現状をみると、「出前授業」という形式が最もふさわしいと考える。

中学校との連携が進展していない。職場体験の学校数の増加、生徒の満足度も高い点は評価できるが、それ以外にも学校課程に関することでの連携、例えば学芸員による出前事業、社会科授業などでの活用などの推進が望まれる。また、中学校への広報活動に関する方針を変更していただきたい。現在の配布枚数は少なく、活用しづらいため、印刷経費の問題もあろうが、全生徒への配布が可能になれば、その内容に応じた活用が進

展する可能性がある。

高校については吹田高校との「高博連携」が締結されているが、連携がやや低調である。平成25年度からは本格的な地域歴史に関する授業が始まるが、それ以外の連携についてもその成果をあげることを期待する。

6 資料の収集と保管 総合評価 3.7点

資料の収集について、収集資料数は昨年より減少しているが、重点収集資料である博覧会資料を春季特別展『万博市民展』において市民からの寄贈や購入が行われている。

今後は計画予定の展覧会で、関連する史・資料等の重点的で能動的、目的的な収集活動が必要であり、その対処が望まれる。また、有機的につながる、ジオラマ展示を意識した一括資料の収集を検討してはどうか。

西村公朝資料についてはその価値を内外に強くアピールし、そのための収蔵スペース確保に努力していってもらいたい。また、新規資料収集のためにも収蔵庫の増設に関する予算措置等に早期に対応すべきである。

また、無形と有形の資料がつながる映像資料の作成、活用をお願いしたい。

資料保管に関しては、定期的にくん蒸作業を実施し、虫菌害の防止が確実に行われている。また、新たな燻蒸剤であるエキヒューム対応の装置への改造を早期に実施した点は評価できる。

資料の整理、登録作業に関するデジタル化への進捗度は昨年に比べると上がっているが全体的に低い。また、デジタル化およびデータベースはこれからの博物館資料の情報管理、情報公開の基本となるものであり、一層の努力が必要である。

7 調査研究 総合評価 3.7点

企画展示の準備過程で関係の調査・研究が行われ、その成果が『博物館だより』や『吹田市立博物館館報』に適宜反映されている点は評価できる。しかし、企画展の図録刊行がやや手薄な感がある。

館が所蔵・保管している古文書の日録作成やそれをふまえた研究はどの程度進められているのか。また、未調査の市内旧家の古文書調査や日録作成なども、地味で多大の労力を必要とする作業であるが、市域の歴史を明らかにし、展示に反映させ、未来の市民生活へも身近なものとして伝承する上でも、基礎的なものとなろう。また、資料の価値付けは未来に託さなければならないようなものであっても史料の散逸を防ぐ上でもきわめて重要である。

調査・研究事業も館にとって必要であり、館全体の力の配分を念頭に置きつつ、これら市民向けサービスのあり方を考えることも重要ではないか。

事業計画として、「調査研究計画の検討」を掲げているが、23年度は「検討中」という結果になっている。共同研究もふまえつつ、なるべく早く調査研究計画の大綱を決定する必要がある。

8 施設の整備・維持管理 総合評価 3.4点

博物館活動を行ってゆくうえでの施設の整備、維持管理は重要なことで、毎年の点検や修理を行うことによって十分な成果をあげている。

博物館へのアクセスは来館者にとって重要である。JR岸辺駅が新しくなり博物館側への

新たな駅前ができたので、この機会を逃さずに表示等を再検討してはどうか。

ビジターセンターの建設は博物館の機能を多様化させる意味で必要であり、これも時間をかけて設立に努力が必要かと思う。

名神高速道路吹田サービスエリアからのアクセス道路は法的な問題など、課題は多いが継続して検討していただいたい。

9 社会貢献 総合評価 3.9 点

学芸員養成課程における博物館実習、JICA研修、学芸員インターンシップなどを受け入れ、人材育成に力を入れていることは評価できる。学会、地域の研究会への支援も果たされている。23年度に新たに支援を実施した百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録に関する活動を行っているフィールドミュージアム史遊会などは、これからの広報等の連携につながるものと期待している。今後は内容、質を高めていく模索してほしい。

総評

吹田市立博物館の平成23年度の事業運営に関しては、博物館の使命、目標に基づき、市民参画、学校教育との連携等をふまえながら多くの展示事業を実施した。また、多様な関連イベントをこなすなど多くの成果を生みだしている。

中期計画における事業展開を今後も進めていく必要はあるが、博物館事業全般としては、評価できる。

一方で、特に秋季特別展『さわるーみんなで楽しむ博物館』は吹田市立博物館の独特な展示企画ではあるもののそれが第一義となり、館員全体の負担となっていることは否めない。そのため、活動項目の各々の努力が平均化されすぎており、本来の館が果たすべき特質がみえにくく、労力もさかれる傾向にあるように思われる点もある。まずは、これまでの博物館の積み上げてきたかずかずの業績を生かしていくことで、その特質を明確なものに位置づけることが館の存在感をもたらす第一義となろう。

そうした博物館の主たる業務の史・資料の収集と保存（保管）、展覧会や催し物等による普及、そして調査（研究）のうち、公開展示・普及業務が学芸員の人数に比べて多いようにも見受けられる。本来、前者の習熟の延長線こそが館の魅力ある公開・活用へと自然とつながるはずであり、公開展示業務の比率を減らし、収集・保存、調査研究の業務比率を高める検討も必要かと思える。ぜひとも、中長期の展望として位置づけてほしい。

*なお、活動目標ごとになされた総合評価の点数は学識経験者6名、学校教育関係者2名、社会教育関係者3名、市民公募委員2名からなる計13名の博物館協議会委員による5点満点の個別評価の平均点とした。